



Title	思春期危機の継時的研究
Author(s)	北村, 陽英
Citation	大阪大学, 1978, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32315">https://hdl.handle.net/11094/32315</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍) 北村陽英  
 学位の種類 医学博士  
 学位記番号 第 4442 号  
 学位授与の日付 昭和 53 年 12 月 20 日  
 学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当  
 学位論文題目 思春期危機の継時的研究

論文審査委員 (主査)  
 教授 西村 健  
 (副査)  
 教授 朝倉新太郎 教授 垣内 史朗

## 論文内容の要旨

### 〔目 的〕

思春期精神医学の発展を妨げている一因として、一般思春期青年の心性に関する研究の不足が考えられる。思春期青年はその文化の相貌の一面であり、その故に時代による変遷も強く現われる。したがって、日本の思春期精神医学を発展させるためには、その時代の日本の思春期青年の心性を十分に追求する必要が生じてくる。1960年代から欧米において、この調査報告が多くなされているが、わが国において継時的調査は村瀬の報告以外には見当らない。私は昭和43年から中学校精神衛生活動を行ってきた。この経験より、現代日本青年が危機的状況にあるか否かをめぐる論議の実証、発達心理学的問題の把握ならびに学校精神衛生活動をより有効にすることを目的として本研究を行った。

### 〔方法ならびに成績〕

対象としては昭和44年から昭和50年までに大阪府下某公立中学校へ入学した男子1,042名、女子1,029名、計2,071名の生徒を選んだ。調査期間は昭和44年4月より、50年度入学生が卒業した53年3月までの9年間である。

まず、2,071名全員に入学時にバウム・テストと文章完成テストを実施し、テスト結果と学級担任の情報を基にして発達心理学的問題を認められた男子290名(27.8%)、女子172名(16.7%)、計462名(22.3%)を抽出した。精神発達遅滞生徒を除いた426名を発達心理学的見地から、次の10類型に分類した。

すなわち、(1)衝動—成熟型(48名)、(2)衝動—未成熟型(75名)、(3)未成熟—依存型(21名)、(4)非協調—自己中心型(45名)、(5)自己顕示—攻撃型(22名)、(6)思い上り型(18名)、自信喪失—逃避型

(56名), (8)萎縮—内閉型 (71名), (9)自己嫌悪型 (60名), (10)精神障害群 (10名)であった。この分類は426名という比較的多数の生徒を対象としたので、発達心理学的に問題のある生徒の類型化を、他の研究者よりも、より包括的に行い得たものと考えられる。

次に、前記2,071名を対象にして在学3年間の縦断的(経過)観察を行った。入学時に発達心理学的問題が認められず、その後在学中に問題を発生した生徒は男子124名、女子53名、計177名であった。これらは前述の10類型のうちのいずれかに帰属すると考えられる。在学中に問題を認められた計603名(29.1%)の生徒の経過を発達心理学的見地から分析した結果は、次のような諸点に要約することができる。

- 1) 思春期の課題として、成熟と自己実現の問題、および周囲あるいは他者への広がりにおける自己の位置づけ、の2点があげられる。
- 2) 成熟度からみて6類型は早期外装的成熟群(衝動—成熟型、自己顕示—攻撃型、思い上り型、自己嫌悪型)と精神成熟遅滞群(衝動—未成熟型、未成熟—依存型)に区別される。中学生においては発達心理学的に、早期外装的成熟の方が精神成熟遅滞よりも問題となり易い。精神成熟遅滞が危機的となることは中学3年間では殆んどなく、3年以上の遅滞度が認められたり、思春期後期に著しく遅滞している場合は危機的となると考えられる。
- 3) 早期外装的成熟群の年度毎の増加傾向が認められ、これは発達加速現象と考えられる。
- 4) 7類型は、自我拡張群(衝動—成熟型、自己顕示—攻撃型、思い上り型)と自我収縮群(自己嫌悪型、非協調—自己中心型、自信喪失—逃避型、萎縮—内閉型)とに区別される。この区別のもつ意味は、思春期の自我発達の様態が、一方には自我拡張的方向の極と、他方には自我収縮的方向の極の対極軸上にとらえられることを意味していると考えられる。

高学年になるに従って、衝動—未成熟型やその他の類型から衝動—成熟型へ移行していく生徒が多く認められる。この傾向は、積極性を有しながらも、それを有効に生かせない故に、思春期における不健康な自己実現と考えられる。特に衝動的で未成熟という心理特性は、いわゆる非行の萌芽と考えられる。非行生徒は自己実現への積極性は十分もっておりながら、それを有効に構築・統制する能力が欠けている。

- 5) 問題発生の時期からみて、全類型は思春期原発性問題(衝動—成熟型、自己顕示—攻撃型、思い上り型、自信喪失—逃避型、自己嫌悪性、精神病・神経症)と思春期以前から持ち越された問題(衝動—未成熟型、未成熟—依存型、非協調—自己中心型、萎縮—内閉型、小児神経症)に区別できる。前者は学童期とは無関係な思春期固有の問題であり、後者は学童期から思春期へ持ち越された発達心理学的問題であり、思春期に入ったが故に、その問題性がより顕在化されたと考えられる。
- 6) 全類型は、その経過から、思春期—過性問題(思い上り型)、児童期から持ち越されて思春期に解決する問題(未成熟—依存型、非協調—自己中心型、小児神経症)、持続性問題群(衝動—成熟型、衝動—未成熟型、萎縮—内閉型、精神病・神経症)および変動性問題群(自己顕示—攻撃型、自信喪失—逃避型、自己嫌悪型)に区別できる。

これら4群のうち、前2群は経過が良好であるが、持続性問題群は卒業後へ問題を持ち越してお

り、中学3年間では経過は不良であった。変動性問題群のうちの $\frac{1}{2}$ は衝動—成熟型へ移行し、 $\frac{1}{2}$ は問題の経過は良好であった。中学3年間において、経過が不良であったものは、それが成人期の人格障害とのかかわりをもつことが予想される。

7) 精神性的発達面において、男子は行動的であるが故に、単純に男性としての性的発達をとげ得ると考えられる。一方、女子は男子よりも複雑で困難な精神性的発達過程を辿ると考えられる。

以上の検討結果と29.1%の生徒が卒業までに特別な指導を要した事実より、現代日本において思春期は危機的年齢層であると考えられる。

#### 〔総括〕

9年間の学校精神衛生活動を通じて、現代中学生の発達心理学的な諸特徴を認めた。これは一般中学生の約3割に認められる問題であり、その約半数が中学校卒業後へ問題を持ち越していることを認めた。これらの事実と、今日の高学歴社会化した中での高校教育の混乱状況を考慮した場合、思春期青年は危機的状況を体験せずして成人期を迎えることは困難であると考えられる。この指導対策として、精神科校医制度や学校カウンセリング・システムの確立をはじめとした中学校精神衛生活動の必要性を強調した。

### 論文の審査結果の要旨

本研究は中学校における9年間に亘る精神衛生活動で集積された多数の資料に基づいて、思春期世代の心性の特徴を明らかにしようとしたものである。

本研究により、発達心理学的に問題となる思春期心性が10類型に整理され、各類型についての経過及び予後が明らかにされた。また、今日の中学生が高率に精神医学的問題を有すること、それらの問題の多くが中学以後にまで持ち越されることが示された。

本研究は現代日本の思春期青年の心性が危機的状況にあること、その対策として学校精神衛生活動が極めて重要であることを実証的に示した点で大きな価値があり、医学博士を授与するに十分値する。